

保育者・教員養成校における「造形」「図画工作」の 活動記録についてのノート —作品をまとめるファイルから過程を捉える練習としてのノートへ—

A Study on the Method of Taking Notes of Art and Handcraft Education in the Childhood Educator Training Facilities: —From "Notes to Bind the Work" to "Notes to Record the Process"—

須増 啓之

要旨

筆者は保育者・教員養成校の造形や図画工作の授業実践で、実技だけでなく制作過程の写真や配布資料などを学生にまとめさせている。過程を重視するこれらの授業において、ポートフォリオとして過程をまとめ、多様性を認めていく力をつける練習が大学でも必要となるのではないかと考える。本小論では、単に作品や資料を綴じていく受動的なファイルから、過程を自分なりにまとめていく能動的なノートへの変遷について報告した。授業実践におけるまとめ方の変遷についてまとめることで、養成校におけるポートフォリオなどにまとめる力を育てるための授業内容や方法論を探る契機になったと考える。

キーワード：造形 図画工作 振り返り ノートづくり 過程を記録する 授業改善

1. はじめに

現在、保育関係でドキュメンテーションやポートフォリオなどの言葉を目にすることが多い。イタリアのレッジョ・エミリアやスウェーデンなどの実践例が紹介されることも多く、国や園の方針などによって記録の方法も多様であることがわかる。

請川はドキュメンテーションとポートフォリオの特徴について、次のように述べている。ドキュメンテーションの特徴を、「クラスの中で起こる子ども同士の関係や、子どもと保護者、子どもとモノとの関係など、二つか（二項関係）それ以上のものとの間で起こるある関係性を示したものであることが多い」としている¹⁾。一方、ポートフォリオは「対象とした子どもがどのような経験をしたかを追った記録の集まり」であるとし、写真や子どもの作品などが盛り込まれ、1年経った時に「その子どもがこの間にどのような経験を積み重ねてきたかが分かる記録」となるとしている²⁾。どちらも写真などによる子供の学びの可視化により、子供の姿や学びを捉えることができる手立てとして有効であると考えられ、日本でも保育や教育で取り入れられ始めている。

このような保育における記録方法の導入の動きに合わせて、保育者養成校の授業においても記録について重視され始めた。たとえば、文部科学省の教職課程コアカリキュラムの「⑤保育内容『表現』の指導法（2単位）」では、〔留意事項〕1）に「ドキュメンテーションやポートフォリオ等、ICTを活用した指導計画や学修記録、幼児にわかりやすい教材や提示資料（ア

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科 助教

アイデアや活動の記録)等の資料作成を行う機会を設ける。」と記されている³⁾。つまり、指導者として、ポートフォリオなどで視覚的にまとめる力、編集する力も養成していく必要があるといえる。また、幼児の造形や図画工作は自分で考えて、自分なりに工夫してつくることが重視される。その点において、保育者・教員養成校(以下、養成校)での「造形」や「図画工作」の授業は、活動をまとめていく力を身につける機会として有効であると考えられる。

筆者は、非常勤講師先や現在勤務先の大学で造形表現や図画工作の授業を担当している。授業では実技体験としての作品制作だけではなく、ファイルやノートに活動をまとめることも行ってきた。しかし、前述したような記録する力やまとめる力について十分に考えてきたわけではない。今後、養成校における「造形」や「図画工作」の授業で、どのような資料作成の機会を設け、まとめる力を養成していくのかなどについて授業内容や方法を考えていく必要がある。そのために、まずは筆者自身の授業実践におけるまとめ方について、その変遷や課題などを整理することが本小論の目的である。

2. 授業における記録及びまとめ方の変遷

2-1. 実技の活動をまとめることになった経緯

筆者は当初から、記録の重要性を意識していたわけではない。筆者が2008年に非常勤講師として初めて勤務した大学は、教員養成課程で学生数が多いため、「図画工作」の同一科目担当の非常勤講師の数も多かった。授業内容は任されていたが、初めての経験だったため、同一科目担当者のシラバスや他大学のシラバスを調べることから始めた。

養成校における領域「表現」の造形表現や図画工作の内容に関しての実技の授業では、学生自身が制作体験をすることを中心に組み立てられる傾向がある。たとえばシラバスを見ると、デッサンやモダンテクニック、版画などの平面技法の体験や発達や仕組みを考えた子供のおもちゃの制作、粘土遊びや立体表現などの制作が多くあった。それらや筆者自身が受けてきた授業を参考に授業を組み立て、実践していった。

またその際、授業として作品づくりだけではなく、授業についてのまとめ方も参考にした。実技が主となる授業のため、評価と関連してそれらの成果をまとめることも必要になってくる。非常勤講師として勤務した教室の棚には作品だけでなく、モダンテクニックなどの体験した作品と作り方が記されたプリントを画用紙に貼って製本してまとめたものや、A3サイズのスケッチブックに実技課題を行い、プリントなどを貼ってまとめたものなどがあった。教師によってまとめ方も大きく異なっていた。これらは学生の視点で捉えると、つくった作品から体験を振り返ることができる活動の記録として、もしくは実習等で使うことができる資料としての役割が大きく、まとめることに満足感を伴った活動であったと考えられる。

また、学生の活動をまとめたものは教師側の視点に立つと、評価の対象として捉えることができる。実技の授業は作品や授業態度による評価が主になり、毎回作品をつくるごとに一つひとつ評価していくこともある。しかし、受講者数やコマ数が少なければ問題ないが、50人以上のクラスやコマ数が多ければ評価が困難な場合がある。たとえば完成作品から評価する場合、続いて授業があるときや保管場所がない環境などにより、その場で評価をつけることができないことが起こる。そのため、制作過程や感想などの活動レポートや作品をファイルなどにまと

めることで、評価として補うことができる利点があったと考えられる。

以上、筆者が授業を参考にした経緯について述べてきた。それらを参考に、作品や活動を記録する方法としてクリアーポケットファイルを選択し、実践を行っていった。そして現在、学生にノートでまとめる形式で授業を行っている。その変遷について、次に具体的にまとめていきたい。

2-2. クリアーポケットファイルにファイリングする

担当する科目が実技だったため、教科書は使用せず、資料などをプリントで配布する授業形態にした。それらをまとめる媒体として、A4サイズのクリアーポケットファイルを選択した。配布資料のサイズをA4もしくはA3で統一し、作品などもまとめることができると考えたからだ。また、ポケットへの入れ替えが可能であり、資料をまとめてファイリングすることもできるので便利だと考えた。

それに合わせて、当初、2種類のプリントを作成して配布していた。制作過程や技法の紹介などの資料と、学生が活動を記録する活動レポートの2種類である。活動レポートは、記述する内容と記録欄をすべて統一したテンプレート形式のものを使用していた(図1)。また、グループ活動の大きな作品や立体作品などはファイルに入れることができないため、レポートには写真を貼るスペースを作成した。筆者が授業後に完成した作品を撮影したり、学生が撮影したデータをメールで提出させたりするなどして、毎回、写真を印刷して学生に1枚ずつ配布した。当初は学生の負担を減らすため、筆者が印刷を行っていた。学生はそれらを貼って作成した活動レポートと配布資料などをクリアーポケットファイルにファイリングしてまとめる。

そして授業を行っていくなかで、配布する資料の作成も変化していった。ファイルを単に配布資料を綴じていくものとするのではなく、ワークブックとして活用できないかと考えた。結果、説明プリントと作品制作を分けるのではなく、プリントにワークを入れた作品ワークシートも作成していくことにした(図2)。

図画工作【1・II】 系(専攻)		学籍番号	氏名	年 月 日()
制作レポート	課題【No.01】	アピール欄(工夫した点など)		
①制作してみて、指導上、気をつけることを挙げてみよう。				
②この制作の前後にどんな授業を計画するのか考えてみよう?				
③「どのような力がつづのか」「どんな能力が伸びるのか」を書こう。				
④感想や気づいたことなど自由に書こう。				

●課程・専攻【 】 学籍番号【 】 氏名【 】	
つくったあとに まとめてみよう!	
型紙とパスで、かたちをうつそう!	
①いい感じにできたところ、工夫してつくったところ、苦労したこと、模様の特徴などを書いてアピールしよう!	
②「パスをこずってみて、どうだった?」「描いたり、まったりするのは、どうだった?」など	
③感想や、友だちの作品を見て思ったこと、課題に関連したこと、調べたことなど書こう!	
記入日: 月 日()	

図1 記入することが固定された制作レポート(左:2009年作成、右:2013年作成)



図2 ワークシート形式のプリント（左：説明用、右：ワーク用、2012年作成）

2-3. ファイルにまとめることに困難さが生じた要因

確かにA4サイズのクリアーポケットファイルはまとめやすい形式であった。しかし、筆者自身がクリアーポケットファイルにまとめることの難しさを感じ始めていた。その背景には大きく三点の要因があり、これらは同時に出てきたものではなく、実践をしているなかで徐々に出てきたものである。

一点目は、筆者が大阪教育大学の佐藤賢司教授が企画した映像教材「図画工作実技のベーシックス」の開発にかかわることで、授業が変化していったことが挙げられる。その変化の過程については拙著論文『『図画工作』における映像教材の活用と授業実践の変化』で述べている⁴⁾。具体的には、授業において「一義的ではない題材の開発」「グループ制作を取り入れる」「作品を大きくする」などを意識し、作品を完成させる授業から、材料などにかかわる造形遊びを主にした活動を多く取り入れる授業へと変化させていった。造形遊びとは、材料や場所に進んで働きかけ、自分の感覚や行為から思いのままに発想や構想を繰り返していく活動である。つまり、作品ではなく過程を重視するため、作品という結果を1枚の写真で残すだけでは活動の記録としては十分ではなく、思いのままにつくる過程を多くの写真で記録する必要がでてきた。その結果、テンプレート形式のレポートでは活動をまとめることが難しいと考えた。

二点目は、評価作業に時間を要することが挙げられる。評価のとき、たとえばコメントを書くときなどはファイルから取り出さなければならない。また、プリントを重ねてファイリングしてあると、それらを出して確認しなければならないこともある。これは、毎回チェックして返したものを閉じるなど教師側の工夫で改善できたと思われる。また、資料などを綴じたファイルはかさばるため、受講者数が多い場合は提出後の保管場所の確保の難しさなども要因として挙げられる。

三点目は、図画工作の授業として、ファイル自体も自由につくれるようにできないかと考え

たことが挙げられる。学生は教師がデザインしたプリントに作品写真を貼り、感想や工夫点などを真面目に記入する。しかし、ポートフォリオとは「画一化されたフォーマットでは伝えられない情報を伝えることができる」という特徴もある⁵⁾。決まったワークシートにまとめて、単に綴じるだけでは作業感が強く、結果、画一化されたファイルに仕上がる傾向があった。つまり、まとめ方にも多様性が必要であり、学生が自分なりにまとめることが重要ではないかと考えるようになった。

以上のような理由から、プリントに記述したものをまとめることに筆者自身、困難さを感じた。確かにポートフォリオということを見ると、入れ替えが可能なファイルは使いやすく、まとめやすい。授業によってはクリアーポケットファイルの代わりに、並び変えることができる2穴フラットファイルを使用する場合もある。その際はレポート用に何も書かれていない紙を渡して、まとめていく方法をとっている。しかし、いろいろな方法を試していった結果、現在はノートにまとめる方法に至っている。

2-4. ノートにまとめる

ノートにまとめることにしたきっかけは、非常勤講師として勤務した大学で松岡宏明教授の実践を見たことである。板書やスライドの記録、形成的評価としての毎回の活動の気づきなどをA4サイズのノートに貼らせ、学びの記録として最終的に提出したものを評価していた。ノートを使用することで、前述した課題に対応できるのではないかと考えた。

また、スマートフォンが普及したことで、高精度のカメラ機能が身近になったことも前述の課題に対応できるようになった背景としてある。1人1台のスマートフォンのカメラ機能を使用して、活動の過程を学生自身がいつでも写真で残せるようになった。それまでは筆者がデジタルカメラで完成作品の写真を学生に配布していたが、教師が撮影しなくても、学生が写真を簡単に撮ることができる。また大学にもよるが、学生が情報教育センターなどで印刷できる大学が増え、学生自身が写真を選択して印刷することが可能になった。学生自身がカメラで写真を撮ることが可能となり、またそれらを支援する環境も整ってきたことで、授業で行ったことを視覚的に振り返ることができる状況になってきたといえる。

その結果、活動や過程を見ることを重視し、それを自分なりにまとめるためにはA4サイズのノートが適していると考えた。以下、具体的なノートづくりについて意識した点について述べていく。

まず、活動を記録するノートにしていくために、スマートフォンで活動を撮影する習慣をつけさせた。自分たちが今、楽しいこと、この表れが面白いと思ったことを撮って残すことを学生に意識させた。しかし、活動中に撮れないことも多く、また思った瞬間に撮ることはできず、少しのずれが生じるという課題もある。ただ、写真を撮って残すことで、振り返りの際、完成作品を見て記述するだけでなく、写真があることでまとめる参考として役立つと考えた。

次に、過程を重視し、学生自身がまとめていくノートにするために、ファイルの際に配布していた資料や活動レポートを減らしていった。説明用のプリントを配布するのではなく、学生自身が体験した過程の写真などを使用して説明などを記述させることにした。また、記入することが固定された活動レポートではなく、記述する内容も学生自身が決められるようにした。記述する枠を限定しない分、ページなども気にせずに活動の記録や感想などを記入することで

多様性が生まれる。記入することが固定されていれば、それに沿って記述するしかない。しかし、ノートにしたことで、たとえば活動を休んだ場合、ノートに書くことがないという理由でまとめないのではなく、自分で関連したことを調べてまとめたり、活動に集中できなかったときは、友だちの作品などの鑑賞を重点的に書いたりすることなどが可能となる。そこで、記述する項目を自由に選択してまとめることで自分なりのノートに仕上げていくことを意識させた。その際、手書きだけでなく、パソコンの文章作成ソフトを使用して作成したものをプリントアウトして貼ることも許可している。

また、ノートづくりについては、学生は授業中にまとめることができないため、授業外学習の課題とし、提出物としてのノートを評価していく。しかし、評価についてのパーセンテージは示していたが、評価規準までは明確にできていなかった。そこで、何のためにノートをつくるのかを学生が把握できるようにするため、ノート作成に対しての目標や評価の明確化が必要となった。その点を松岡教授はルーブリックのなかで評価規準として明記していた。そのルーブリック評価を参考として作成したものを、学生に提示するようにした（表1）。

表1 授業ノートのルーブリック

授業ノート（20点）				
20	15	10	5	0
〈右〉にプラスして、自分なりのメモや記録などが記され、自分なりの工夫を加えた創造的なノートに仕上がっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・板書をしっかり記録している。 ・全ての配布物などが貼りつけられている。 ・活動の感想や気づきなどが自分の言葉で書かれている。 ・制作過程や作品の写真が貼っており、過程も捉えることができるようになっている。 ・他者に伝わるように見やすくまとめられている。 	〈左〉に比して、欠落している部分や不十分な点がある。（写真や感想、気づきなどにばらつきがあるなど）	記録や配布物、作品の写真などがかなり欠落していて、感想などがほとんど書かれていない。	指定外、未記入、未提出。

（松岡宏明作成のルーブリックを参考に作成）

授業ノートの評価として明確にしたため、今まではシラバスの目標にノート制作についての記述はなかったが、目標にも記述する必要が出てきた。そのため、現在の担当科目「美術Ⅰ」などの授業目標には、「授業での活動を授業ノートに記録していくことで、まとめたり、伝えたりする力も養う」という文言を付け加え、評価では「授業で行った活動について、自分なりに記録としてまとめることができる」を追加した。

さらに授業初回のオリエンテーションでは、以下のような授業ノートのまとめ方についてのパワーポイントを見せ、意識づけを行っている。

- ① 感想は「楽しかった／難しかった」などでは終わらない。「何が」「どう」「楽しかったのか／難しかったのか」。そう思ったのは「なぜか」を具体的に考えて記述すること。
- ② 完成作品の写真だけでなく、制作過程も写真にとってノートに貼ってまとめること。
- ③ 感想だけでなく、授業回によっては「友だちの作品の鑑賞」「こんなのをやってみたい」

「関連して調べたこと」なども記述すること。

- ④ 自分が振り返ったり、現在の到達点や今後の課題を考えたりするために、わかりやすくまとめること。
- ⑤ 他者に伝わるようにタイトル、見出し、図、写真、イラストの大きさ、デザイン、余白などを考えて構成すること。
- ⑥ 以上の点を踏まえ、自分なりに工夫してノートを作成すること。

以上のような点を意識して、自分なりに柔軟に取り組むことがまとめる力を育てることにつながると考え、学生にノートを作成させていった（図3）。



図3 学生のノート作成例

2-5. 自分なりにまとめることの課題

ファイルやノートなどを自分なりにまとめるにあたって、実践をしなくなかで以下のような課題に当面している。

まず一点目は、学生によるノートなどの完成度の差である。毎回、授業外の課題としてノートをまとめていくよう意識させているが、忙しい学生も多く、提出前の週にまとめてつくり上げる学生の姿も多く見受けられた。また、活動日とノート記入日の間隔が空くと、記入することが思い出せず、抽象的で内容の薄い記録になることも多い。結果、過程などを写真で説明して自分なりに仕上げてくるノートと、写真や感想などもなく十分にまとめられていないノートにわかれる。ただ作品の記録だけでは意味をなさず、単にノートをまとめて提出するという作業に留まってしまっても意味がない。学生に自分なりに体験を可視化することの重要性を十分に意識させる必要がある。

確かに自分の気づきや発言を活動中に記録できたり、その日に記入する時間を設けたりできればいいが、それは難しい。また、板書やパワーポイントのメモなどをまとめる時間を、授業中に確保ができていない。学生は板書を写真に撮って、ノートをまとめる時にスマートフォンを見ながら記入していることもある。授業中の板書などをまとめる工夫も必要であったと考える。それに関連して、授業外学習としてノートを作成させているが、授業評価アンケートでは、予習・復習をしたかという項目では、大部分が「していない」や「1時間未満」と答えている。ノートづくりが課外学習になることを意識づける必要もある。

二つ目は写真の意義を学生十分に伝えられていない点である。完成した作品としての結果ではなく、造形や図画工作において過程を重視しているが、それを文章化するのは容易ではない。それゆえ写真が重要となってくる。ただ、この写真も単にノートづくりを作業として捉えて撮影していると、単なる一場面の写真でしかなく、自分がいいなと思った場面などでないため、写真が意味を成さなくなってしまう。また、ある一人が撮影した写真を友だちなどで共有するため、ノートに同じ写真が貼られていることも多々あった。写真を撮ることが作業になってしまったという反省がある。

三点目はノートの構成である。ポートフォリオは順序立てて設計できるものではなく、どんどん変えていけるような可変的な設計を重視するべきだといわれている⁶⁾。つまり、ポートフォリオは並び替えが可能だが、ノートは前から順に書いていく必要があり、ページを並び替えることはできない。それゆえ、その都度、まとめていくしかなく、後からの追加などが難しい。自分なりにまとめることを意識させているが、ノートという構造では不自由な点も多いことがわかった。

ここまで、筆者自身の実践におけるファイルからノートへのまとめ方の変遷や課題などについて述べてきた。どれが適しているか、授業方法や環境などによって異なると思うが、筆者が実践してきたファイルやノートのメリットやデメリットについてまとめておく（表2）。

表2 まとめる媒体のメリット・デメリット

	ファイル (A4)	スケッチブック (A3)	ノート (A4)
作品の 収納	<ul style="list-style-type: none"> • A4サイズに入る作品はポケットに収納できる • 大きい作品や立体は作品写真を撮る、折って貼ることで対応できる 	<ul style="list-style-type: none"> • 直接、描いたりすることができ、作品としてそのまま残すことが可能 • 立体作品は写真を撮って貼ることで対応できる 	<ul style="list-style-type: none"> • A4サイズに入る作品は貼ることができる • 大きい作品や立体は作品写真を撮る、折って貼ることで対応できる
ページな どの構成	<ul style="list-style-type: none"> • ページの入れ替えや追加が容易 • 2穴ファイルなどはページ数を増やすことが可能 • ポケットに入るワークシートにまとめる範囲が限定されてしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> • ページの入れ替えや追加などが困難 • 増やす場合2冊目が必要 • 直接書き込める • まとめる際の自由度や写真などを貼るスペースが広い 	<ul style="list-style-type: none"> • ページの入れ替えや追加などが困難 • 増やす場合2冊目が必要 • 直接書き込める • まとめる際、自由にページ構成ができる
保管・ 持ち運び	<ul style="list-style-type: none"> • カバンなどに入れて持ち運びが可能 • 授業外でまとめる際、場所などにとらわれない 	<ul style="list-style-type: none"> • ロッカーなどが無い場合、保管場所が必要 • 持ち運びが困難 • 授業外でまとめる際、広い作業スペースが必要 	<ul style="list-style-type: none"> • カバンなどに入れて持ち運びが可能 • 授業外でまとめる際、場所などにとらわれない

3. 学びを可視化し、まとめることができる力を育てる実践を目指して

以上、筆者自身の養成校での造形や図画工作における活動をまとめる実践についてまとめてきた。筆者自身の実践をまとめると、作品や活動レポートを受動的にまとめるファイルから、過程を捉えるための練習としてのノートづくりへの変化であったといえる。しかし、現在、過程を記録しノートをまとめることに重点をおいた授業に留まっていることも確かである。単にプリントを配布して、撮影した写真と貼って綴じるだけでは受け身のノートになる。さらに能動的にかかわることができるまとめ方を考えていく必要がある。

また、幼児教育におけるドキュメンテーションやポートフォリオは、保育者が子供の様子を記録することで、その学びを捉えることができる有効な手立てとなる。活動を見るということを見ると、現在のノートではあくまで学生個人の過程を見るということに留まっている。つまり、自分の活動を観察して、自分で記録することが主になる。確かに客観的に学生自身の活動を振り返るものとしては有効であったと考える。しかし、これから養成校として、ドキュメンテーションやポートフォリオにまとめていくことで子供の学びを捉えることができるように養成していくのであれば、それだけでは不十分であり、他者の活動を観察して記録することが効果的となってくるであろう。具体的には、学生自身が他学生を観察し、活動を記録する機会も入れていく必要がある。また、その中での気づきをまとめて、伝え合うなどの共有する機会を持つことでまとめる力が養われるのではないかと考える。その方法の一つとしては指導法などでの模擬保育や模擬授業が有効であると思われる。

そして、まとめることについて考えると、1年生では活動や学びについてのまとめる力をつけることは難しい。レッジョ・エミリアなどではドキュメンテーションの記録方法についての研修があるといわれている。つまり、過程を捉えて効果的に記録するためには訓練が必要である。現在、学生に自分なりにまとめることを重視しているため、過程の見方や捉え方は学生に任せている。完成度を高めること目指しているわけではないが、ある程度、レイアウトや記録に関する知識、活動を捉える観点などについて伝える授業回を設定することも重要なのではないかと考える。

現在、ノートを使用して学びの過程を可視化しているが、最近ではA4サイズのノートでも小さく感じられ、前述した課題なども踏まえ、まとめる媒体を考えていく必要もでてきた。今後、まとめるための異なった方法などを検討していくことも重要であると考え。たとえば、写真だけではなく動画や録音などICT機器を使用することで、学生のドキュメンテーションが可能となってくるのではないだろうか。また、上越教育大学のような4年間の学びのカリキュラムを設定し、学年を通してログケースと白ファイルを使用して作品や学習指導案などをまとめ、4年間の学びを蓄積する実践例もある⁷⁾。現在、筆者の授業でのノートづくりは授業ごとでしか捉えておらず、4年間の学びという長い期間でまとめるという意識を持つことができていなかった。筆者自身、ドキュメンテーションやポートフォリオなどで学びや過程をまとめる力を養成校の造形や図画工作の授業で育ていきたいと考えているため、今後の課題としてその他の可能性を実践のなかで見出していくべく、さまざまな方法を試していきたい。

4. おわりに

本小論は、筆者自身の授業におけるまとめ方の変遷の報告であり、十分な論証ができていない。過程を捉えていく学びとして、ドキュメンテーションやポートフォリオなどに言語化や視覚化を通してまとめていくことが重要となってくる。養成校における造形や図画工作の授業がそのような力をつけていく学びの機会の一つとなるのではないだろうか。また、今回はノートとして筆者自身の授業のまとめ方の変化を振り返るという作業に留まっている。今後の課題として、具体的な学生のノートの検証や受動的なファイルから能動的なノートへの質的な変化や学生の反応などについての検証をしていくことが挙げられる。また、作成したノート自体、学生が振り返りに使用しているのか、今後の学生の活用状況などについても調べる必要がある。そして、授業実践を行うなかで、ドキュメンテーションやポートフォリオなどの学びや過程を捉える学びの方法について、さらにより良い方法を探していき、今後の研究につなげていきたいと考える。

【註】

- 1) 請川滋大他編著、『新時代の保育1 保育におけるドキュメンテーションの活用』、ななみ書房、2016年5月、p.7
- 2) 請川、前掲、p.7
- 3) 保育教諭養成課程研究会、「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」、2017年3月、p.32
- 4) 須増啓之、『「図画工作」における映像教材の活用と授業実践の変化』、神戸親和女子大学児童教育学研究第36号2017年3月、pp.65-76
- 5) 青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース+フィルムアート社、『ポートフォリオをつくろう！ 新しい自己PRのための「編集デザイン」』、フィルムアート社、2015年7月、p.13
- 6) 青山学院大学大学院社会情報学研究科ヒューマンイノベーションコース+フィルムアート社、前掲、p.112
- 7) 上越教育大学の「初等教育における造形表現力育成のための基礎研究－学部学生のためのスタンダードとカリキュラムを中心に－」（研究代表：西村俊夫、2009年－2010年）の報告書を参考にした。